

第2章 安曇野市の概要



田植えの風景(平成6年・中萱)

2.1 自然的・地理的環境

(1) 位置・面積

当市は長野県の中中部、中央よりやや北西に位置し、県庁所在地の長野市から約50km、東京から約180kmに位置します。鉄道で、東京から3時間30分ほど、名古屋から2時間30分ほどの場所です。

北は大町市、松川村、池田町、生坂村、筑北村に、南は松本市に隣接しています。南北に約21km、東西に約26km、市域の面積は331.78km²で、県内第9位の広さです。

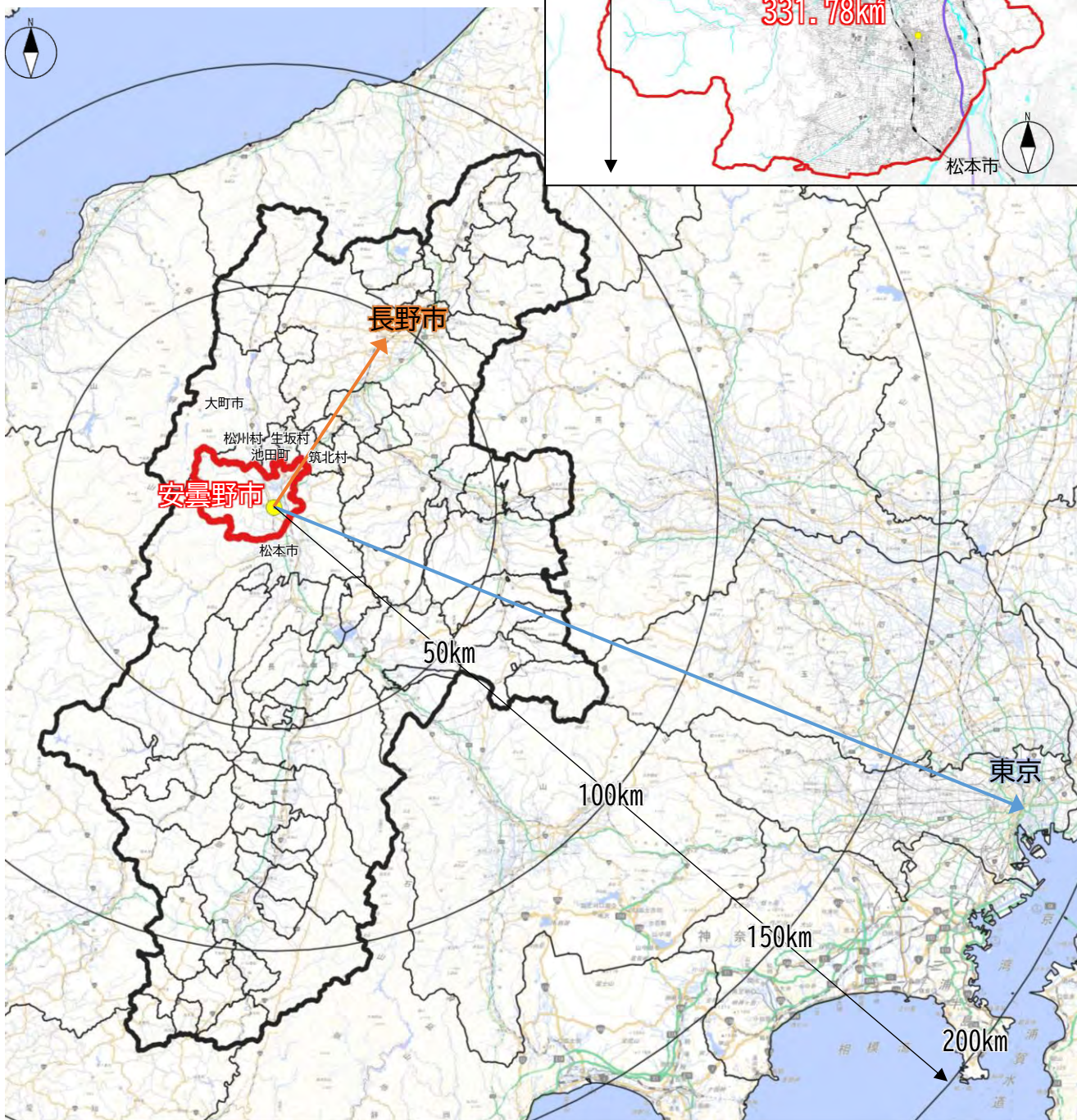


図2.1 当市位置図

出典：国土地理院

(2) 地形

当市の西側は北アルプスの一部を構成する山岳地帯で、3,000m級の山々が連なり、その山麓部には、西側山岳地帯を源とする河川により形成された複合扇状地が広がっています。犀川右岸（一部左岸）には小規模な河岸段丘がみられ、その東側には通称「東山」と呼ばれている比較的なだらかな筑摩山地及び中山山地があります。

東西の山に囲まれた松本盆地のうち、梓川より北の標高500～700mの平坦な地形は、通称「安曇野」として知られています。周辺の山々を源とする河川が集まる場所となっており、特に犀川、高瀬川、穂高川の合流点付近は「三川合流部」と呼ばれています。



図2.2 当市の地形図

出典：国土地理院
※高さは2倍にして強調



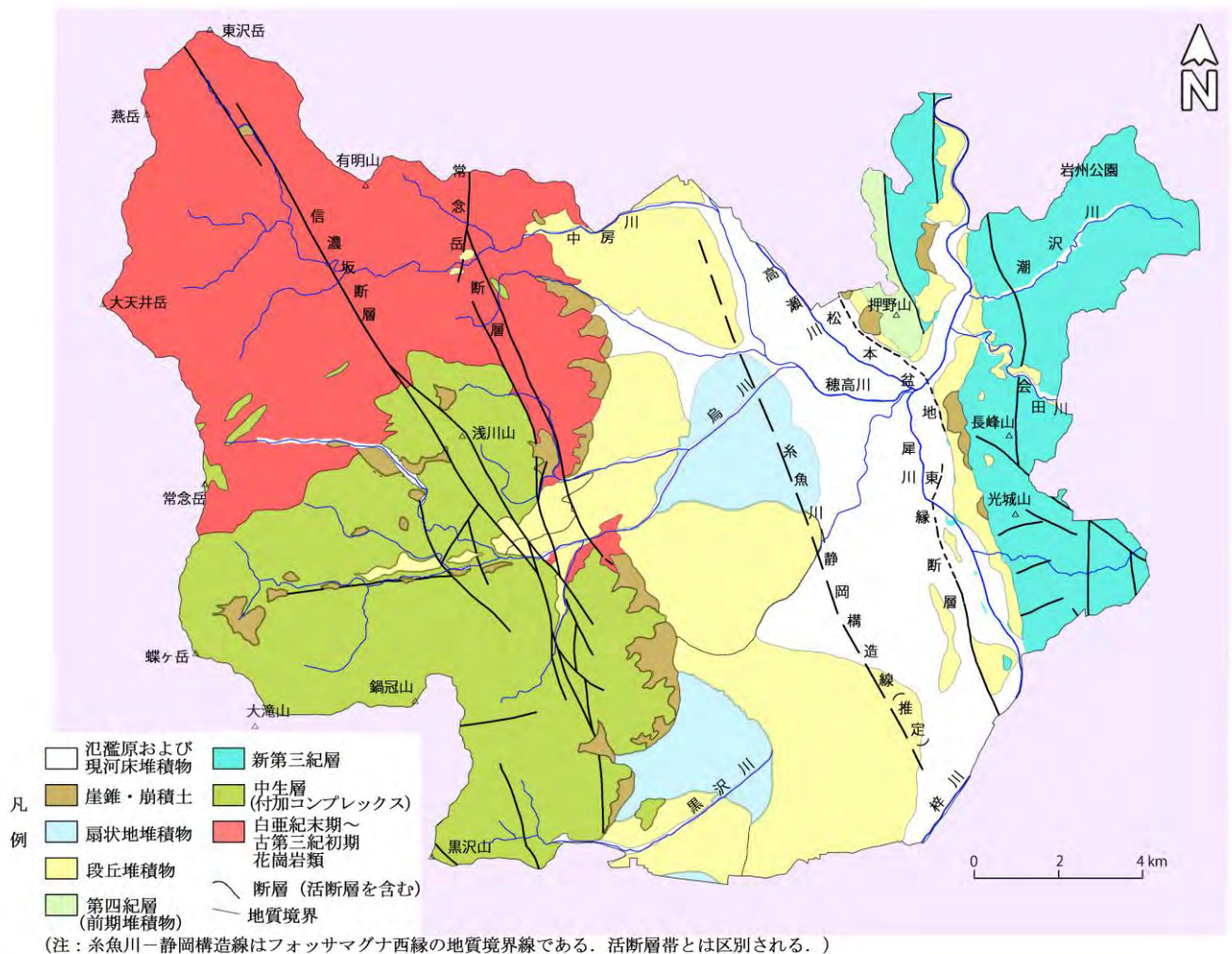
図2.3 穂高地域牧地区から望む安曇野と東山

(3) 地質

当市中央を南北に走る糸魚川-静岡構造線は「フォッサマグナ」と呼ばれる地質区の西端の境界線にあたります。東西で大きく二つに分けられ、東側は新生代新第三紀中新世以降の海底に堆積した堆積物からできた礫岩・砂岩・泥岩の堆積岩からできており、化石を産出する地層もあります。これに対して西側は、マグマが地下深くで冷えて固まってできた花崗岩類と、海洋プレート上の堆積物が、プレートが沈み込む際に大陸側に押し付けられてできた「付加コンプレックス」と呼ばれる砂岩・泥岩・チャート等の堆積岩類からできています。

北アルプスが第四紀に急激に隆起したことが原因で、西側山麓部に扇状地堆積物・段丘堆積物が広く分布しています。大きな河川を通じて供給された大量の砂礫が厚く堆積し、最大400~500mにもなると推定されています。この砂礫層は地下水の帯水層となっていて、湧水地帯の地下水の供給源となっています。

松本盆地西側には常念岳断層が南北方向に、信濃坂断層が北西から南東方向に、直線的な谷をつくっています。東側には松本盆地東縁断層が南北方向に伸びています。



出典：安曇野市版レッドデータブック2014を改定したもの

図2.4 当市の地質分類図

(4) 水理

当市を流れる河川は北アルプス・筑摩山地に源流があり、これらの河川は明科地域で犀川と合流し、日本海へ流れていきます。

犀川へ流れ込む支流の多くは扇状地の途中で伏流してしまうため、この地域は古くは稲作に適していませんでした。水不足を解決しようと、拾ヶ堰に代表される農業用の堰（用水路）がつけられ、その結果、現在も見られる水田地帯が形成されました。

伏流水となった地下水は、扇状地の扇端で湧水として砂礫層のすき間から湧き出し、動植物の貴重な生息・生育場所となっているほか、近代から現代における「わさび畑※」や養魚等の産業発展に結びついています。また、市の上水道は全て地下水でまかなわれており、市民生活の支えとなっています。

※本計画ではわさび生産地を「わさび畑」と表現します

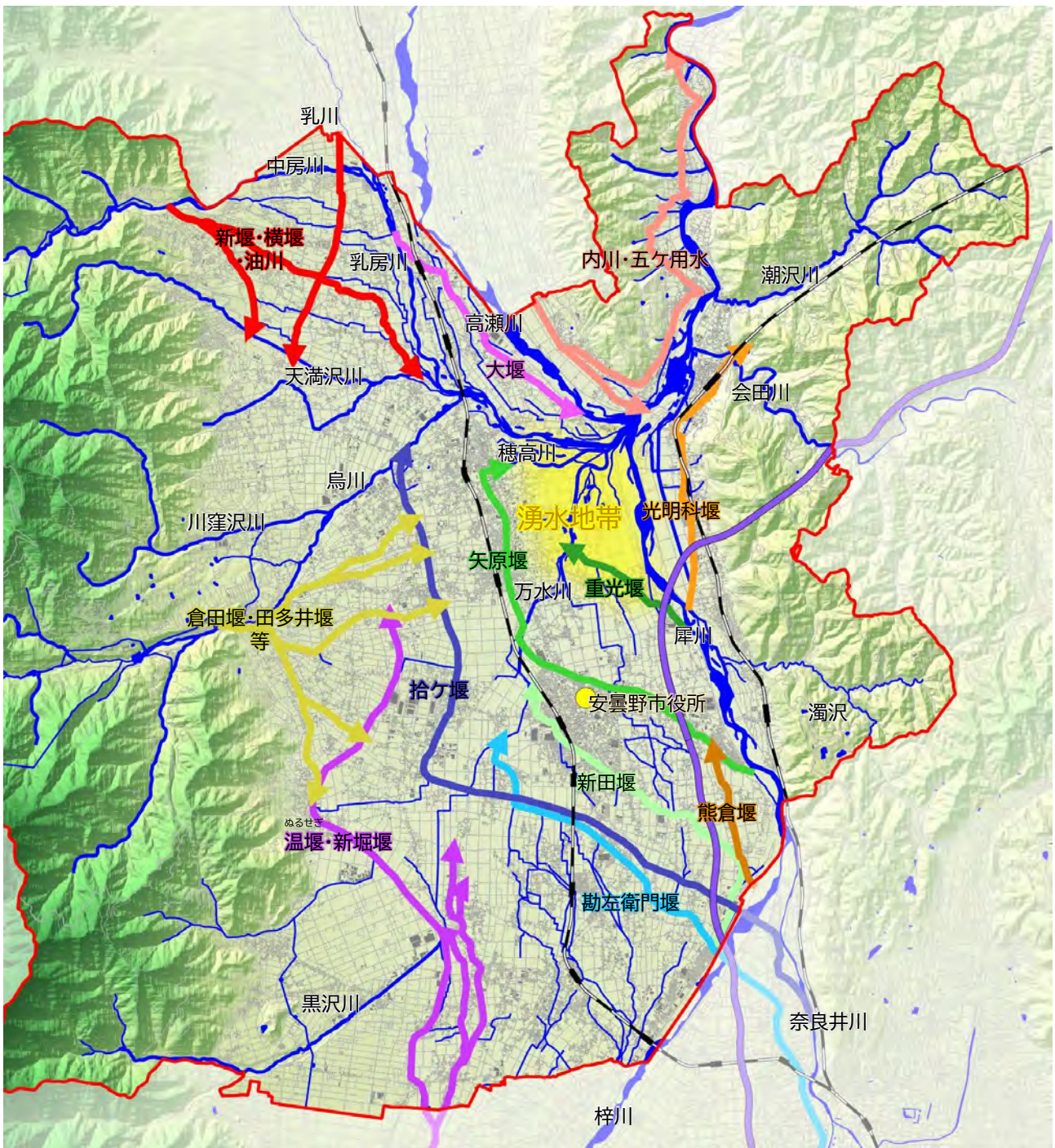


図2.5 当市の水理図

出典：安曇野市水環境基本計画を元に作製

(5) 気候

当市は海から比較的遠く、標高の高い盆地に位置するため、中央高地式（内陸性）気候です。気温の較差が大きく、気温の日較差（1日の気温差）により放射冷却が強く働き、秋から春にかけては降霜、霧、雲海等が発生します。また年間を通じて降水量が少ないという特徴があり、冬場は寒冷ですが、県内では降雪の比較的少ない地域です。

南北に開けた盆地であることから、伊那谷から松本盆地北端にかけての風の通り道となっており、当市の南部では春先に強い南風が吹き込みます。

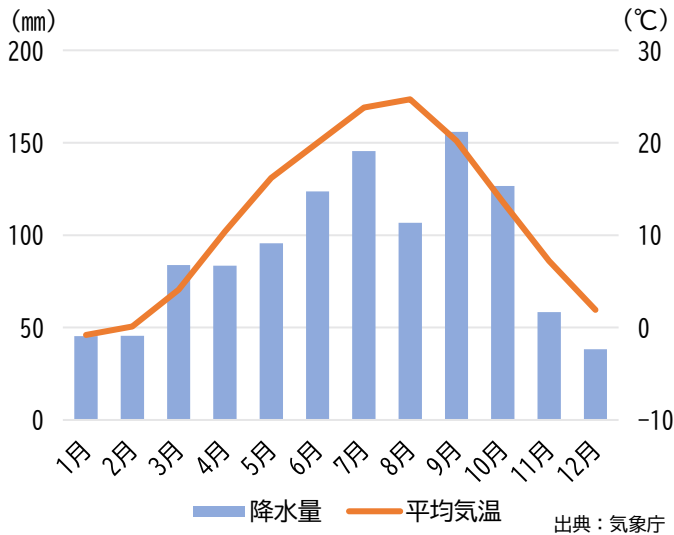


図2.6 穂高の月別降水量および気温



図2.7 放射冷却による雲海

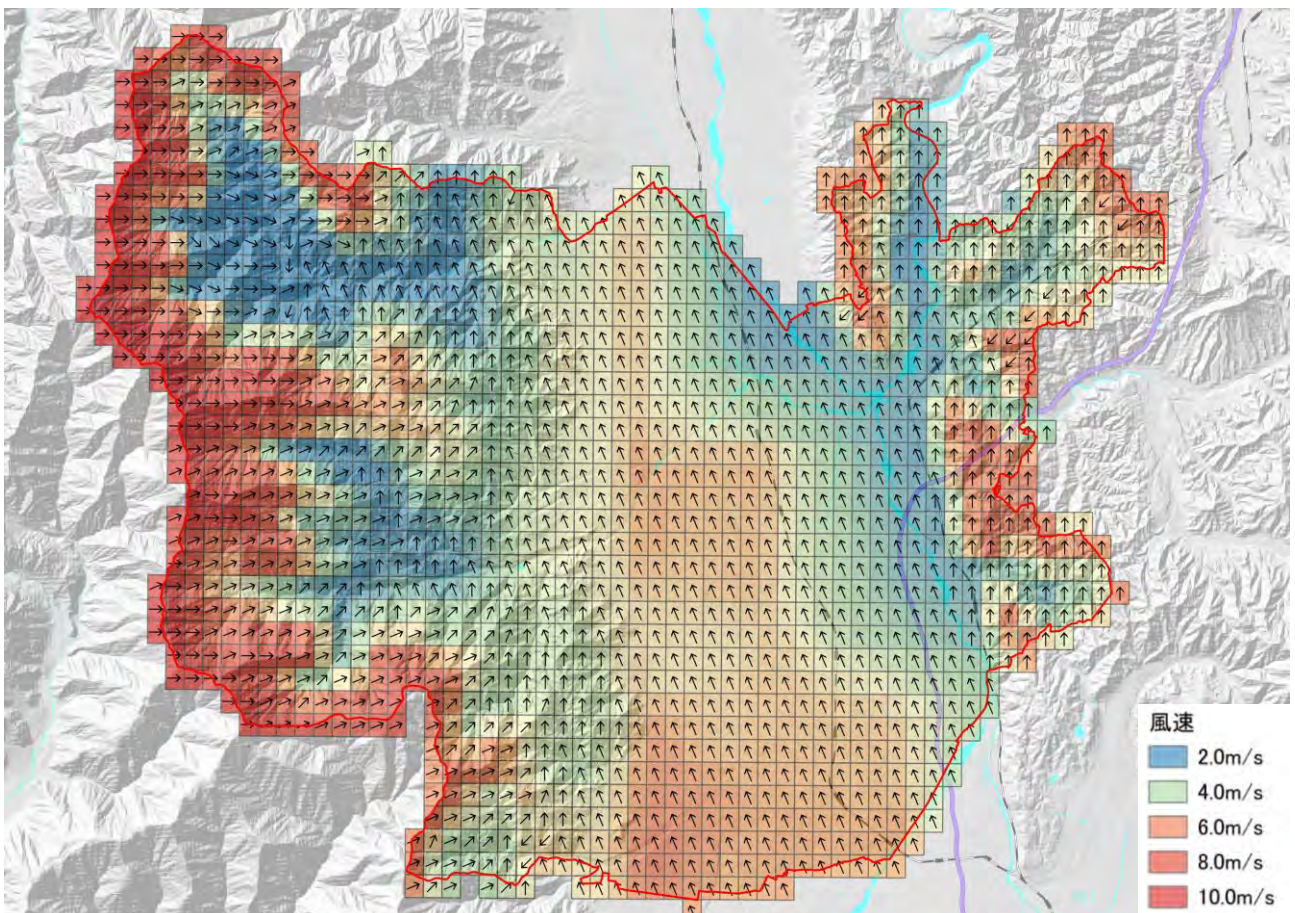


図2.8 当市の風況図

出典：環境省「風況変動データベース」
 ※上空80mの風速・風向をシミュレーションしたもので、
 矢印の向きは1年で最も頻度の高い風向を示す

(6) 植生・動物

標高差が約2,500mにおよぶ当市は、標高帯ごとに環境が異なります。高山帯、亜高山帯、山地帯、山麓・平野部、河川・水辺の五つに区分することができ、それぞれの区分の中に森林、草原、市街地、河川等様々な環境要素が見られます。

標高2,400m以上の高山帯には、気候的要因により森林は成立せず、背の低いハイマツを中心とした群落や高山草本植生が見られ、ライチョウやオコジョ、高山蝶等が生息しています。

標高1,600～2,400mの亜高山帯には、シラビソ帯を中心とした常緑針葉樹林が、森林限界付近には背の低い落葉広葉樹林が広がり、ニホンカモシカやニホンモモンガ等が生息しています。

標高700～1,600mの山地帯には、人々の長年の利用により、カラマツ等の植林地や落葉広葉樹からなる二次林が広がっています。ツキノワグマやニホンザル等が生息し、人間とのすみ分けが課題となっています。

標高700m以下の山麓・平野部では、そのほとんどが人の生活域であり、水田や畑地、果樹園等の農耕地や住宅地・市街地になっています。社寺林や屋敷林ではフクロウ等が生息しているほか、水田地帯はトノサマガエルやドジョウ等の生息地となっています。

河川・水辺では標高を問わず、溪流沿いにはサワグルミ等の湿った場所を好む落葉樹の林が見られ、湧水地や池沼にはバイカモ等の水生植物が生育しています。犀川の遊水池にはハクチョウやカモ類が越冬のため渡来します。

市内に生息・生育している絶滅のおそれのある野生生物や、当市の重要な自然環境、注意すべき生物（外来種等）についての情報をまとめた『安曇野市版レッドデータブック』が平成26年（2014）に作成され、令和4～5年にレッドリストの改訂が行われ、令和6年（2024）に改訂版としてまとめられています。



出典：安曇野市版レッドデータブック2024を一部変更

図2.9 植生イメージ

2.2 社会的状況

(1) 市の沿革

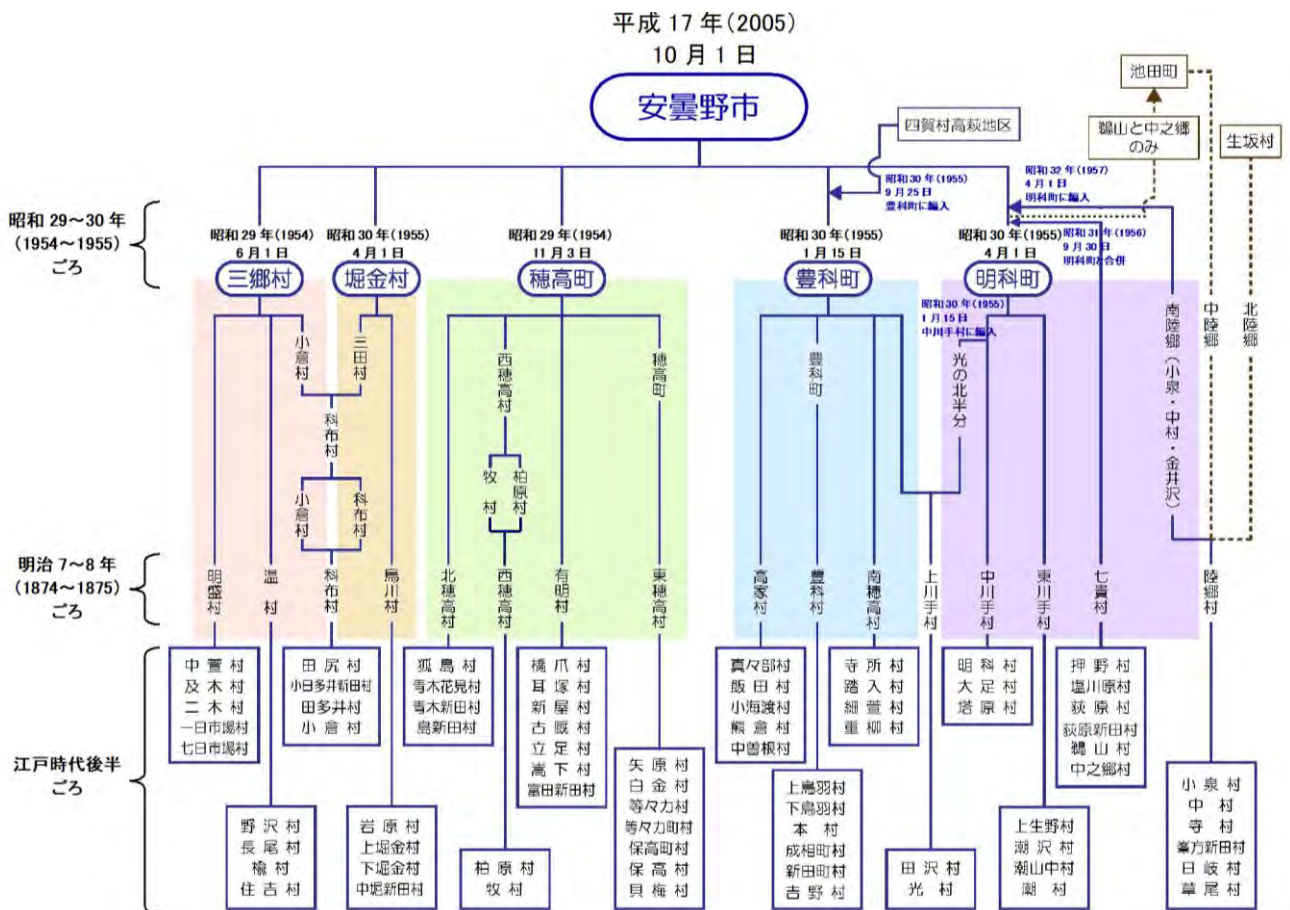
当市の行政区は、江戸時代後半には70以上の村々に分かれており、これらの村名の中には、現在の当市の地区名として残っているものも数多くあります。明治維新以後、廃藩置県により郡県制が始まり、この地域は明治4年（1871）に松本県の所管に入り、ついで周辺の県と合併して筑摩県となりました。長野県に編入されたのは明治9年（1876）でした。明治12年（1879）には南安曇郡および東筑摩郡が行政区画として発足しました。

昭和28年（1953）から昭和36年（1961）にかけての「昭和の大合併」により、豊科町、穂高町、三郷村、堀金村、明科町の旧5町村が誕生しました。合併に至るまでには町村ごとに様々な経緯があり、分村して別々になった村もありました。

そして、平成17年（2005）10月1日、南安曇郡の豊科町・穂高町・三郷村・堀金村と、東筑摩郡の明科町の5町村が合併して安曇野市が誕生しました。



出典：安曇野の郷科書
図2.10 昭和の大合併以前の町村の境界



出典：安曇野の郷科書
図2.11 安曇野市になるまでの町村の移り変わり

(2) 人口動態

当市の総人口は平成22年（2010）をピークに減少に転じ、令和2年（2020）には94,222人（国勢調査）となりました。令和7年（2025）8月1日時点での人口は92,439人（長野県人口異動調査）です。国立社会保障・人口問題研究所（以下「社人研」）の推計によると、令和32年（2050年）の人口は78,135人となる見通しです。今後30年間で、総人口は約17%減少し、年少人口は約32%減少、生産年齢人口も約29%減少する一方で、老年人口は10%増加し、高齢化率は42%になると推計されています。

人口の社会動態は、移住者の増加に伴い近年プラスで推移しているものの、少子高齢化が進む中で自然動態による減少幅が大きく、人口減少の要因となっています。

地域別にみると、1970年以降は明科地域を除き、人口は増加傾向にありました。しかし2005年頃から人口増加は頭打ちとなり、減少に転じる地域も増加しています。

特に明科地域では、1995年と比較し2020年の人口は約24%減少し、年少人口は約44%減少、老年人口は約36%増加しました。人口減少率が「過疎地域の持続的発展の支援に関する特別措置法」に定める過疎地域の要件に該当し、令和4年（2022）には過疎地域として指定を受けました。

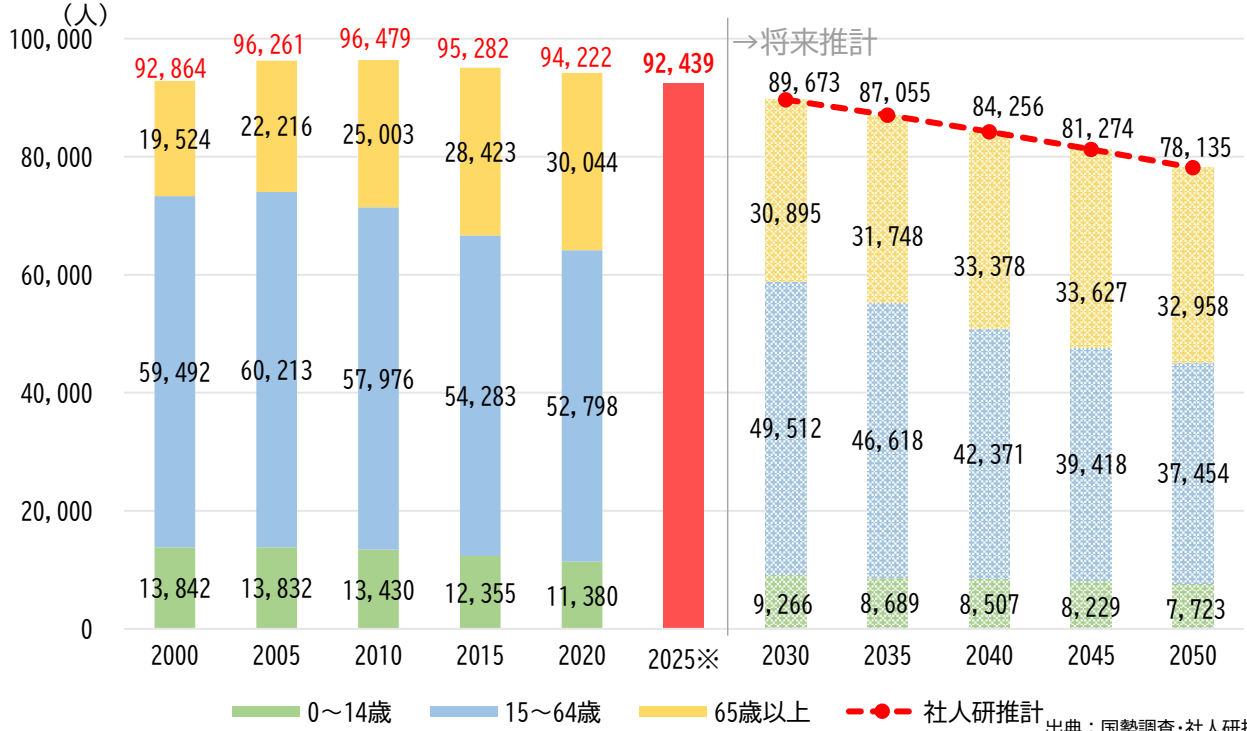


図2.12 当市の人口動態 ※2025年は長野県人口異動調査による8月1日時点人口

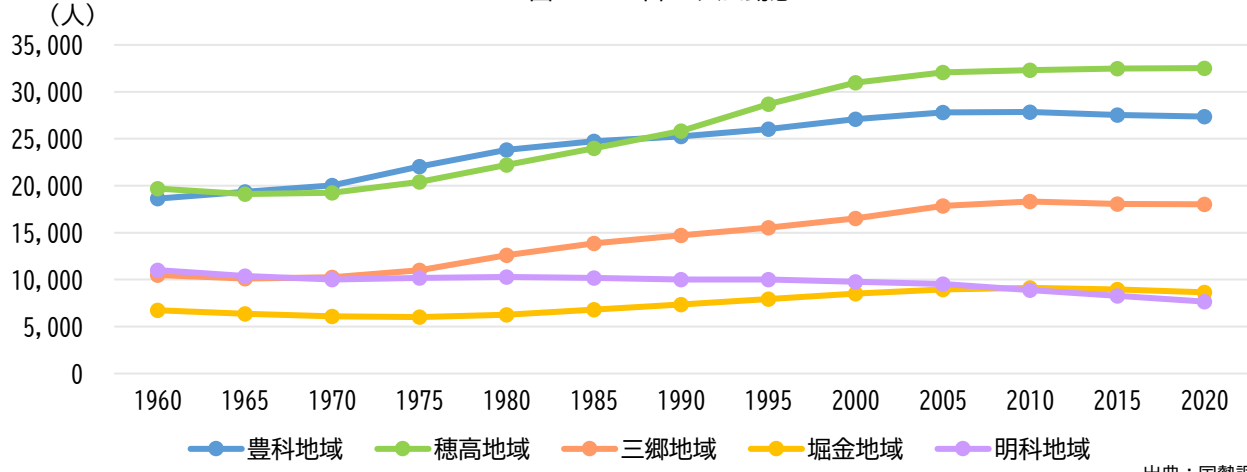


図2.13 地域ごとの人口動態 出典：国勢調査

(3) 土地利用

当市における土地利用は、自然的土地利用※1が約85%と大半を占めますが、その面積は減少傾向にあり、都市的土地利用※2が増加しています。

自然的土地利用は、東西を北アルプスおよび東山の低山に囲まれているため、土地利用の約60%は山林が占めています。西側の山岳地帯の一部は中部山岳国立公園に含まれ、山麓部には国営アルプスあづみの公園（堀金・穂高地区）があります。平野部は田園が広がり、田が約13%、畑が約8%となっています。特に三郷地域の扇状地の扇央部分にあたる所ではりんご畑が、穂高地域の扇状地の扇端部分にあたる所ではわさび畑が広がっています。

都市的土地利用では住宅用地が約6%、商業用地は約0.8%と、全市的にみれば少ないものの、近年その面積は拡大傾向にあります。豊科地域や穂高地域では今なお多くの住宅地が造成され、転入者の受け皿となっています。安曇野IC付近や国道147号沿いには商業施設が多く、日常生活の利便性に貢献しています。

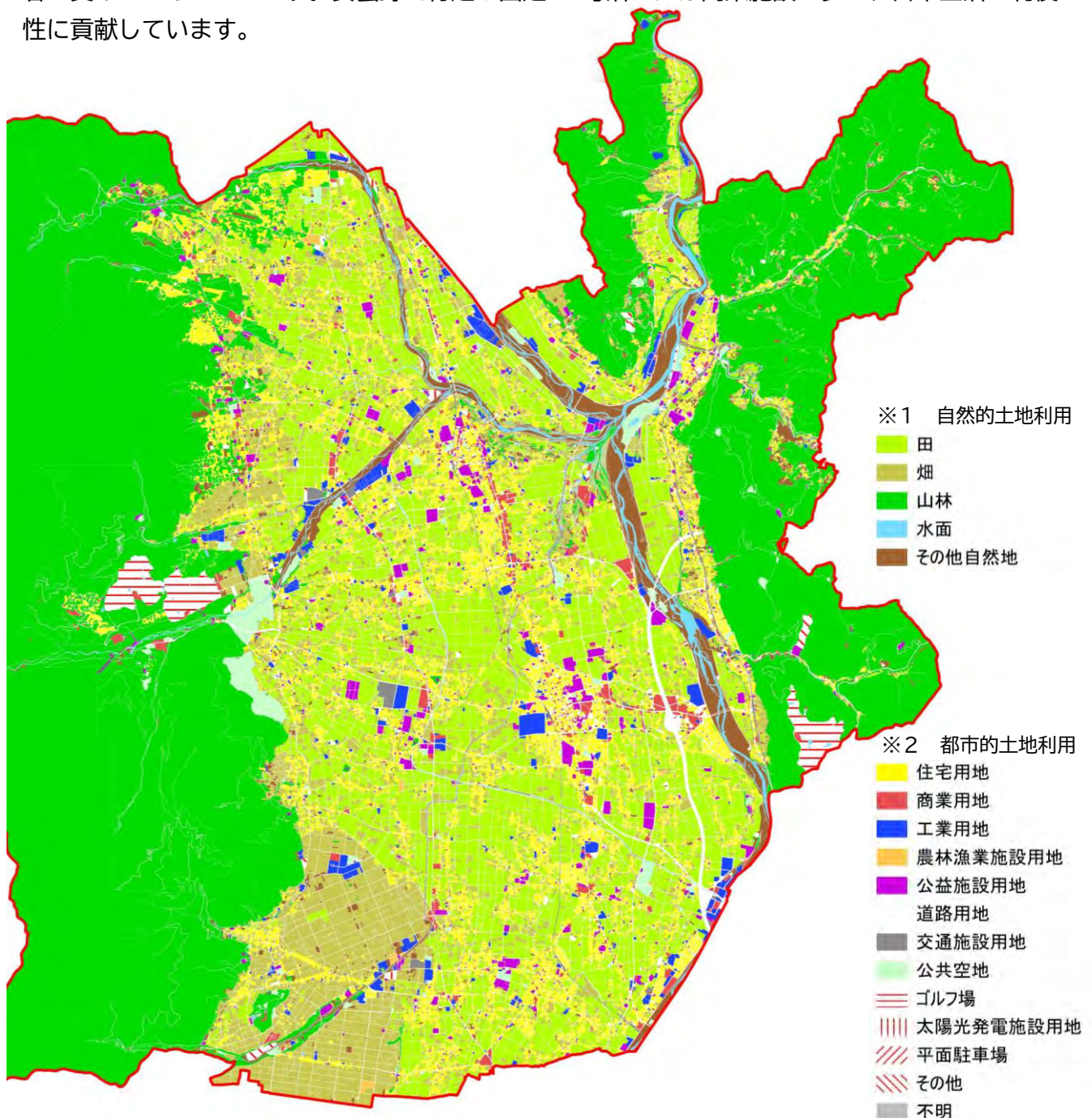


図2.14 当市の土地利用

出典：令和5年度都市計画基礎調査

(4) 交通

当市を通る鉄道は、長野・塩尻間を結ぶJR篠ノ井線（市内2駅）と松本・糸魚川間を結ぶJR大糸線（市内9駅）が存在します。

昭和63年（1988）に長野自動車道の豊科ICが開通し、平成24年（2012）に豊科ICは「安曇野IC」に名称変更されました。平成22年（2010）には梓川スマートICが供用開始し、近隣の産業団地や医療機関へのアクセスの向上に寄与しています。

当市には国道が4路線通過し、特に市内中心部を通る国道147号と国道19号は人の移動や物流の大動脈となっています。また、平成10年（1998）の長野冬季オリンピックの開催に際し、高瀬川右岸の堤防道路が開通し、安曇野ICと大町・白馬方面間の移動に利用されています。主に東西をつなぐ県道や、南北をつなぐ広域農道は幹線として日常生活で利用されています。

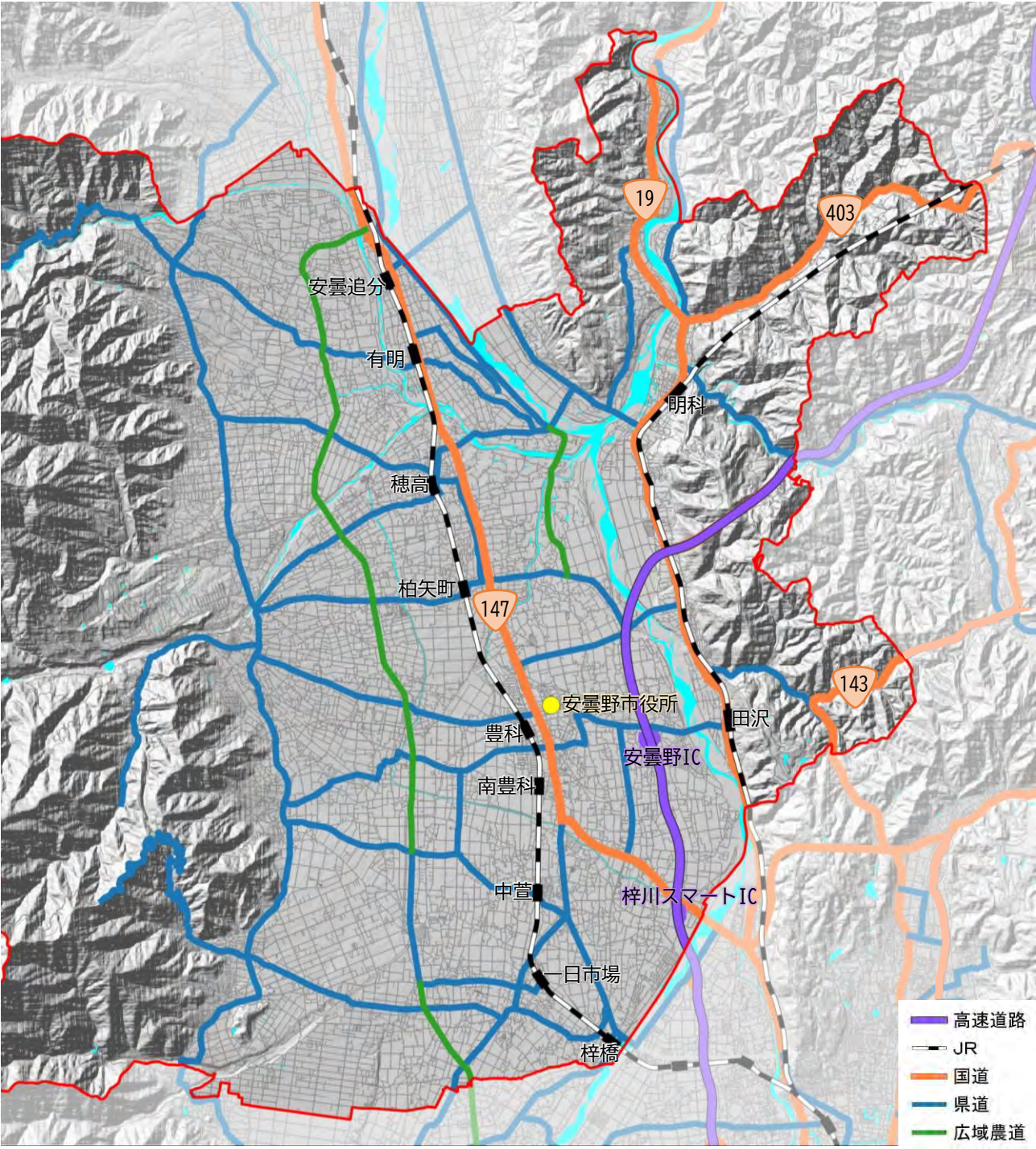


図2.15 当市の主要道路

(5) 産業

当市の就業者数は約48,000人で、第1次産業が約8%、第2次産業が27%、第3次産業が62%となっています。

当市は田園景観に恵まれています。農家数は、販売農家の減少に伴い、20年前と比較すると35%の減少となっています。

製造業は最も従業者数が多く、製造品出荷額は平成17年（2005）の合併後から平成23年（2011）までは県内第1位を誇りましたが、令和2年（2020）は約3,980億円で、県内第5位でした。近年の産業団地の拡大に伴い、今後の成長が期待されています。

第3次産業は近年就業者が増加傾向にあり、卸売業、小売業や医療、福祉に従事する人が多いことがわかります。

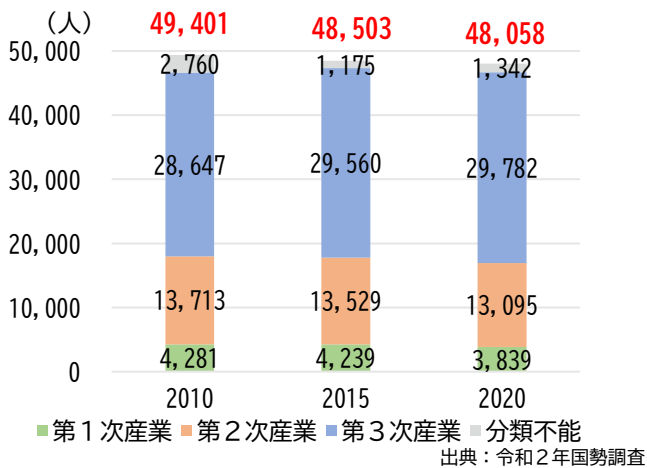


図2.16 産業別就業者数推移

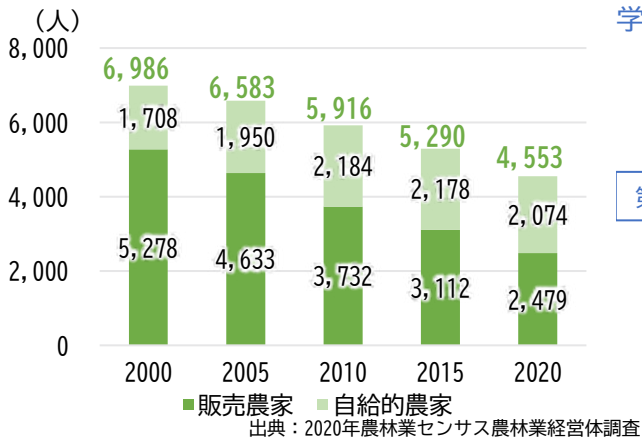


図2.17 農家数推移

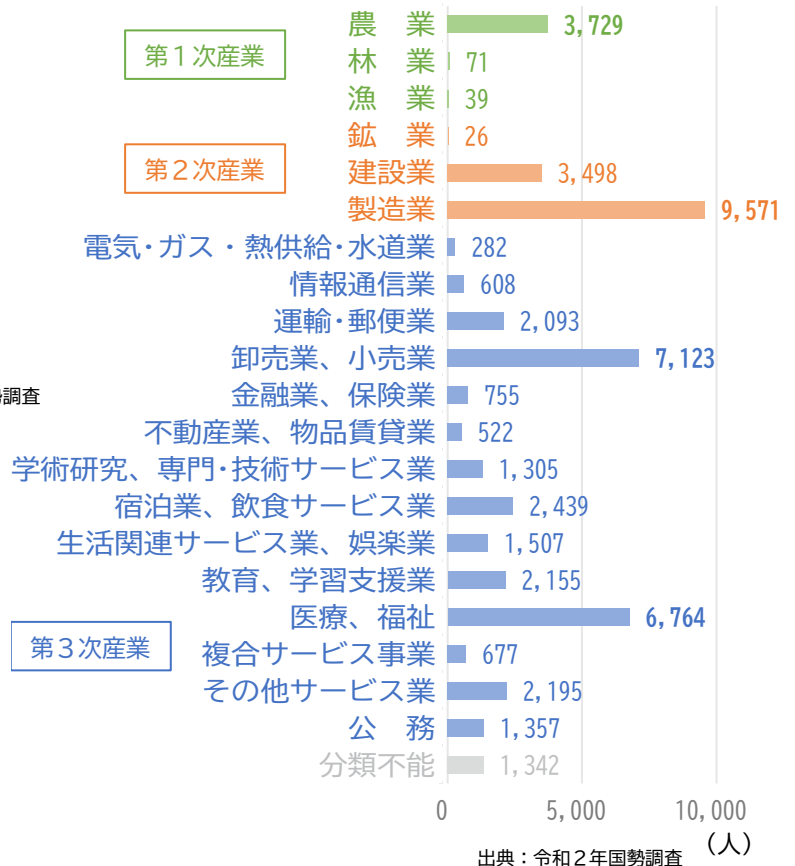


図2.18 産業別従業者数

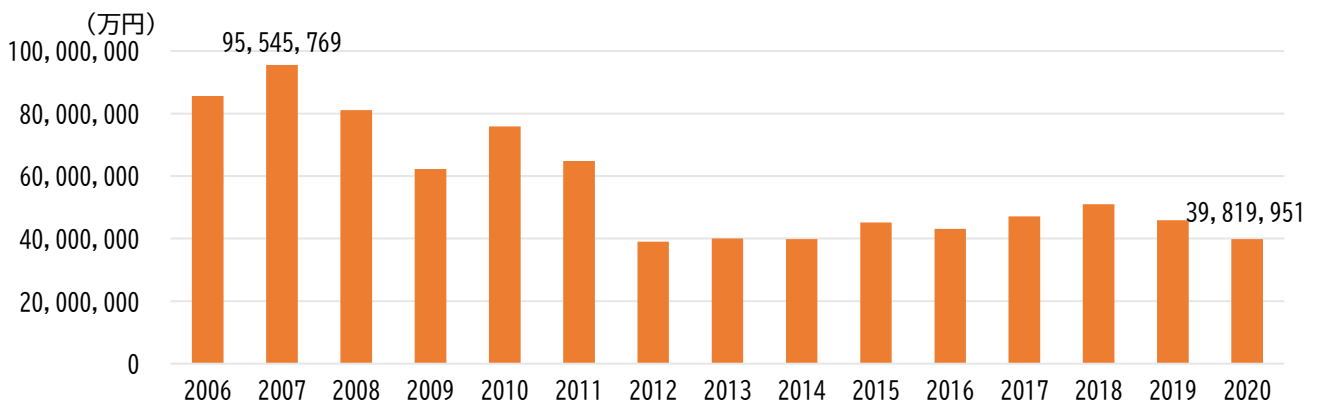


図2.19 製造品出荷額推移

(6) 観光

当市の主要観光資源は、温泉、山岳、湧水地、市街地、名所旧跡等が各所にあり、これらと宿泊、飲食、物販、文化芸術施設が結びつき、様々な観光スポットとなっています。また、県内各域や、隣県の主要観光エリアとをつなぐ、広域的な位置特性を持っています。

観光客数は、令和元年（2019）までは年間約500万人が来訪していましたが、令和2年（2020）より新型コロナウイルスの感染症の影響に伴い来訪者数は減少し、その後回復傾向にあります。当市の観光の特徴として、来訪者の満足度が高く、来訪者に占めるリピーターの割合が8割であることが挙げられます。

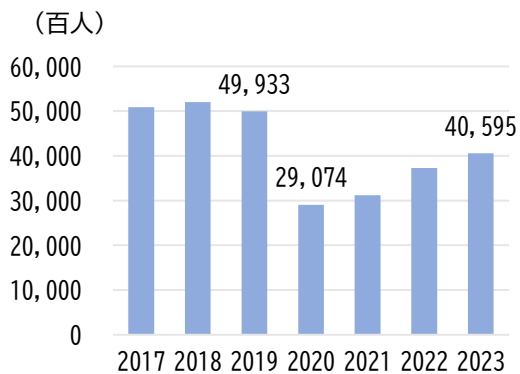


図2.20 観光客数推移 出典：長野県観光統計

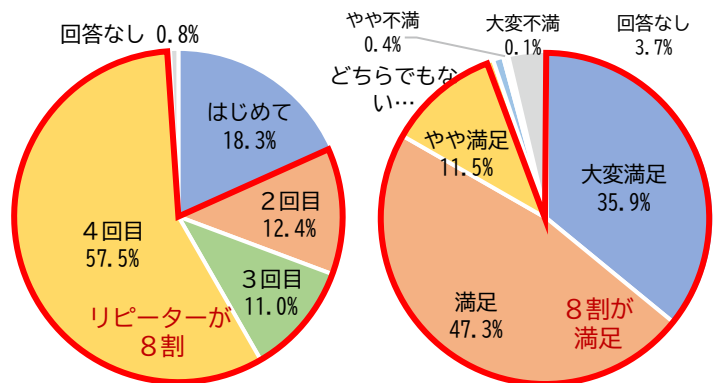


図2.21 観光客の動向 出典：安曇野市来訪者アンケート



図2.22 市内主要観光資源や広域的な位置特性

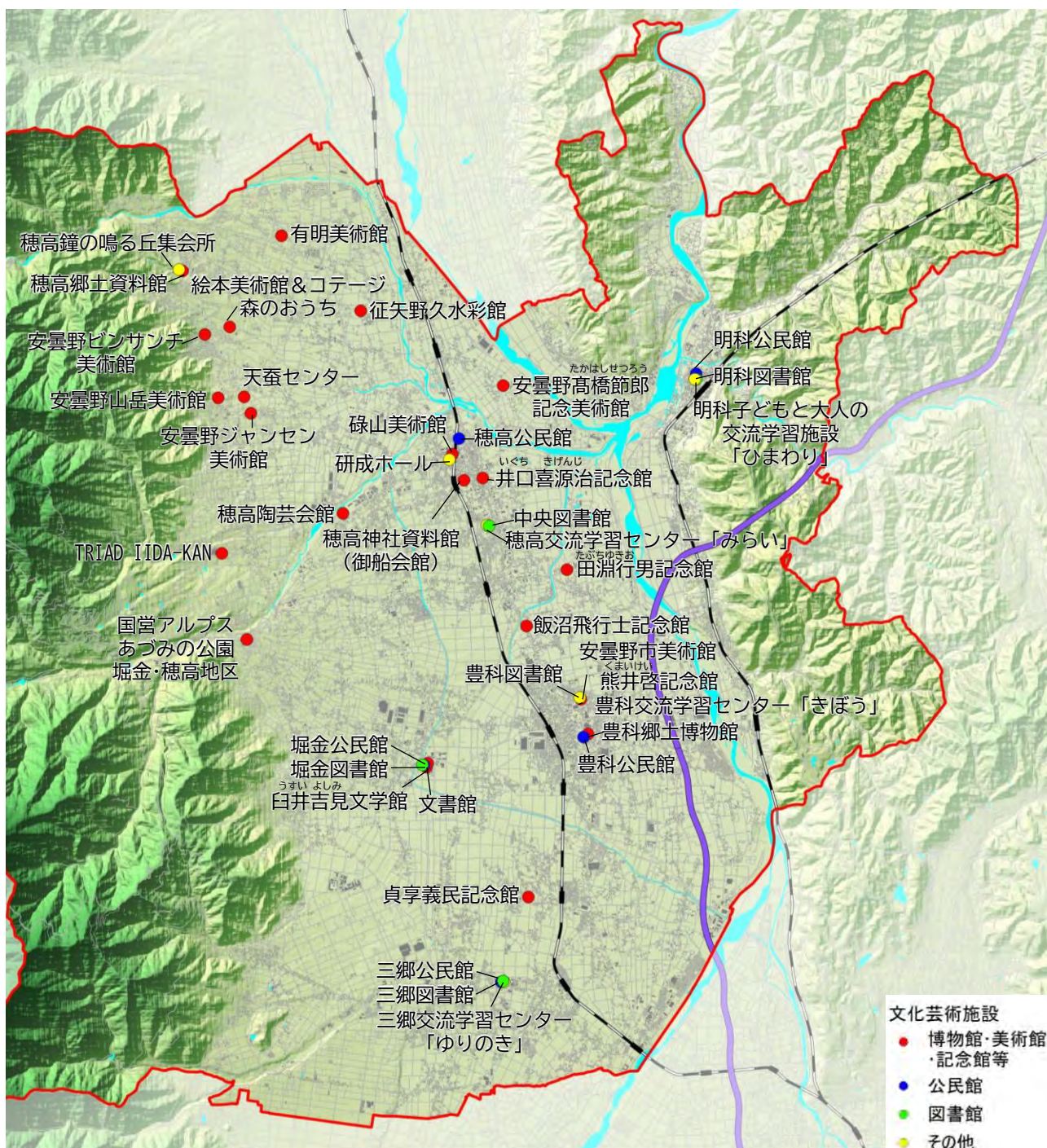
出典：安曇野市観光振興ビジョン

(7) 文化芸術施設

当市には公立、私立を合わせて20館を超える博物館・美術館・記念館等があり、このうち9館が市立の博物館(博物館類似施設も含む)です。また、新市立博物館の整備に向けた検討が進められています。

文書館は、文化的な価値を有する公文書・地域文書・書籍を収集、保存しており、当市の貴重な資料を次世代につなげています。5地域それぞれの図書館蔵書を合計すると約46万点あり、令和6年度(2024)の市民一人当たりの貸出数は約7.7冊となっています。

五つの地域の公民館は社会教育施設として、多くの市民に利用されています。生涯学習の場のみならず、地区公民館と協力して地域づくりの推進にも取り組んでいます。



出典：長野県教育要覧より作成

図2.23 文化芸術施設

2.3 安曇野市の歴史

(1) 原始

日本列島に人類が渡来したのは3万8千年前とされています。当市域ではこれまで旧石器時代の人類の痕跡は確認されていません。

縄文時代早・前期の土器は、明科の「わで やしき いせき上手屋敷遺跡」をはじめとする市内のいくつかの遺跡で見つかっています。しかしその量は少なく、集落を形成していたかわかっていません。明科光の「北村遺跡」では縄文時代中・後期の敷石建物跡50棟のほか、469基の墓ほこうと300体の人骨が発見されました。市域の西山方面でも牧の「た や いせき他谷遺跡」では土器や土偶が、「はなれやま いせき離山遺跡」では祭祀の痕跡である配石遺構が出土しました。「ひがしおぐら いせき東小倉遺跡」では縄文時代中期の大集落跡が発見されており、遺跡全体の竪穴建物跡は100軒以上と推測されています。

南陸郷の「ほうろく屋敷遺跡」では、弥生時代の再葬墓が見つかりました。墓に用いられた土器は当市で最も古い弥生土器の一つとして、当時の文化を知る貴重な資料です。弥生時代に日本列島で水田による稲作が普及しましたが、当市では当時の水田遺構は確認されていません。しかし、室町の「くろさわがわ とうぎ黒沢川右岸遺跡」出土の土器には稲粃とみられる痕跡が見つかっています。また糸を撚るための土製紡錘車とせいぼうすいしやが出土したことから、糸をつくる技術があったことや、小瀬幅の「こせ しば町田遺跡」では磨製石鏃ま せい せき ぞくの未完成品が出土したこと等から、弥生時代には様々な技術があったことがわかります。



図2.24 両耳付壺形土器
(東小倉遺跡)



図2.25 蛇体把手付ワイングラス形土器
(ほうろく屋敷遺跡)



図2.26 広耳把手付土器
(他谷遺跡)



図2.27 出土土器(ほうろく屋敷遺跡)



図2.28 糸を撚るための紡錘車
(黒沢川右岸遺跡)



図2.29 土偶(北村遺跡)

(2) 古代

3世紀後半から6世紀末にかけての古墳時代は、全国各地で前方後円墳を代表とする古墳が数多く築かれた時代です。当市でも古墳時代後期の100基以上の古墳（円墳）が見つかっており、この地域一帯の開発を進めた人々の暮らしぶりをうかがうことができます。穂高地域に存在する「穂高古墳群」は後述する矢原（八原）郷の前身にあたるムラに暮らしていた人々の墓と考えられ、勾玉やガラス玉等の装身具や、直刀、馬具等の副葬品が発掘されています。潮の「潮古墳群」の一つからは、銅鏡が出土し、仏具や下賜品として捉えられることから、「明科廃寺」や当時の政権との関係を示す遺物と考えられています。6世紀に国内に仏教が伝来し、白鳳時代には全国各地に寺院が建立されました。「明科廃寺」もその一つで、出土した素弁八葉蓮華文軒丸瓦や、一緒に出土した土器から7世紀後半の創建とされています。多量の軒丸瓦や鴟尾・瓦塔等が出土していますが、伽藍配置は未だに明らかになっていません。「明科廃寺」近隣の「栄町遺跡」では同時代の建物跡が確認されています。田沢の「上ノ山窯跡群」は県下最大の窯跡で、須恵器を生産し、松本平一円に供給していたと考えられています。

この頃、現在の北安曇郡から南安曇郡にかけて阿曇郡（安曇郡）ができたこととされ、平安時代の『和名類聚抄』によると、安曇郡には「高家・八原・前科・村上」の4郷が記されています。このうち、八原郷は現在の矢原から松川村にかかる地域だと推測されています。また、平安時代の『延喜式』に「穂高神社」が名神大社として記されており、靈験あらたかな神社として重要視されていたことがわかります。



図2.30 A-6号墳(犬養塚)出土といわれる馬具飾り
(穂高古墳群)



図2.31 須恵器の窯跡
(上ノ山窯跡群)



図2.32 素弁八葉蓮華文軒丸瓦
(明科廃寺)



図2.33 明科廃寺2018年度第5次調査

(3) 中世

鎌倉時代に、八原郷は伊勢神宮に寄進され矢原御厨^{みくりや}と呼ばれ、全国の御厨の中でも最大級の耕地面積を誇りました。そのほかにも後白河院^{ごしろわいん}に関する住吉庄も広大な領域を擁していました。当市域一帯でも、中央の貴族や有力な社寺が領するいくつかの荘園が編成されましたが、実際は現地の有力者が支配し、地域の開発を担っていました。

室町時代の後半に、豊科地域では細萱氏、光氏、田沢氏、飯田氏、熊倉氏、成相氏等、穂高地域では穂高氏、等々力氏、古厩氏^{ふるまや}等、三郷地域では二木氏、及木氏^{およびき}、中萱氏、長尾氏等、堀金地域では堀金氏、田多井氏等、明科地域では大葦（大足）氏や塔原氏等、現在でも地名として名が残る有力者が各地を治めていました。その館跡や城跡は各地にみられます。彼らは安曇郡北部の仁科氏や、小県^{ちいさかた}から旧四賀村に勢力を広げた海野氏らの国衆に属していたとされています。

戦国時代の天文19年（1550）、甲州の大名である武田晴信（信玄）が深志城（松本城）に入り、安曇郡への侵攻を開始しました。天文21年（1552）には晴信自ら軍勢を率いて小岩嶽城^{こいわたけじょう}を攻め落とし、安曇郡は武田氏の支配下に入りました。永禄10年（1567）、安曇・筑摩両郡の武士は生島足島神社（上田市）で武田氏への忠誠を誓い、その起請文（誓約書）が同社に残されています。

中世には水利技術の発達により、縦堰の開削が進み、良質な耕土が堆積する地域に導水されて、水田面積が広がりました。また、信仰の拠点として、多くの社寺が建立されました。温の平福寺には鎌倉時代初期の制作とされる「木造聖観音立像^{もくぞうしょうかんのんりゅうざう}」が安置されています。大足の光久寺^{こうきゅうじ}には、鎌倉時代末期の文保元年（1317）善光寺仏師妙海^{ぜんこうじ ぶつ しみょうかい}によって制作された「木造日光・月光菩薩立像」が安置されており、同像は制作年代が分かる仏像の中では当市最古です。



図2.34 細萱氏館跡遠景



図2.35 鳥羽館跡の堀跡



図2.36 小岩嶽城跡



図2.37 木造日光・月光菩薩立像(左右両端の仏像)

(4) 近世

江戸時代に、当市全域は松本城主の支配となりました。当市は必ずしも豊かな土地ではなく、扇状地で土壌が砂礫質のため、農業用水の確保が困難でした。貞享3年（1686）には中萱の多田加助が中心となり、年貢軽減等を松本藩の郡奉行に願い出て（五ヶ条の訴状）、多くの農民が松本城下に押し寄せる貞享騒動が起きました。この騒動を指揮した罪で加助ら首謀者28名は処刑されました。中萱の貞享義民社は加助たちを顕彰するため、明治時代になって建てられたものです。

承応3年（1654）に臼井弥三郎らにより矢原堰が、貞享2年（1685）に二木勘左衛門らにより成相新堰（勘左衛門堰）が、文化13年（1816）に等々力孫一郎らにより拾ヶ堰が開削され、水田開発が進みました。長尾組（現在の三郷・堀金地域）の大庄屋を務めた岩原の山口家には今も屋敷と庭園が残り、名勝として当時の繁栄を物語っています。

市内には千国道が南北に縦貫し、その途中には保高宿（穂高宿）や成相新田宿が置かれ、大町・松本方面へ人や物の流れをつなぐ重要な役割を果たしていました。文化11年（1814）には、当時の人気作家の十返舎一九が取材旅行で新田町村の藤森家や満願寺を訪れ、その見聞をもとに『続膝栗毛』で主人公の弥次さん・喜多さんの満願寺への珍道中を描きました。

市内の各所を流れる河川には木製の橋が架けられましたが、水量が安定しないことや増水の影響で、渡し舟による輸送が主流だったと考えられています。犀川では筏流しによって大木を善光寺方面へ運搬していたことや、天保3年（1832）には犀川通船が開始され、松本と信州新町を結ぶ物資輸送が盛んに行われる等、河川交通が活用されていたことがわかります。



図2.38 まんがんじ みみょうばし
満願寺の微妙橋と地蔵堂



図2.39 山口家



図2.40 拾ヶ堰



図2.41 寛政年間の絵図に描かれた保高宿

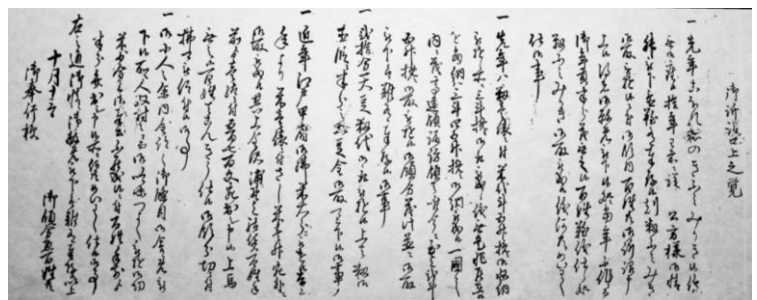


図2.42 五ヶ条の訴状

(5) 近代

明治4年(1871)の廃藩置県により、当市域は松本県または伊那県に属し、のち筑摩県に編入されました。明治9年(1876)には長野県管轄となり、明治12年(1879)に行政区画として南安曇郡(犀川以西)と東筑摩郡(犀川以東)が発足しました。南安曇郡の郡役所は豊科村に設置されました。明治22年(1889)には町村制が施行され、大字にあたる多くの地域が村として発足しました。

明治から昭和にかけて、当市からは社会運動、芸術、学問、文学の分野において偉人が輩出しました。松澤求策や井口喜源治、荻原守衛(碌山)、相馬愛蔵・良(黒光)は、臼井吉見の小説『安曇野』にも登場し、その活躍が知られています。明治43年(1910)には明科地域で宮下太吉が爆発物の製造・実験を行ったとして逮捕され、大逆事件のきっかけとなりました。

明治35年(1902)に篠ノ井線が、大正5年(1916)に信濃鉄道(現大系線信濃大町以南)が全線開通し、交通輸送の主役は水運から陸運へと劇的に移行しました。穂高地域では明治初年から、梨畑の排水を利用したわさび栽培がはじまり、鉄道開通後、次第に梨畑はわさび畑に転換され、大正時代末期には広大なわさび畑が整備されました。水田に適さない土地には桑畑がひろがり、養蚕業も盛んでした。また夏蚕種や秋蚕種の改良に伴い、明治時代末期から大正時代初期にかけて蚕種の一大生産地となりました。

小田多井出身の臥雲辰致が明治6年(1873)に太系紡織機(ガラ紡)を発明し、昭和12年(1937)に豊科に紡績の工場ができました。

大正15年(1926)に明科地域の倉科多策が明科養鱒場を設立し、主にニジマスの養殖を行う等、長野県の水産業発展にも貢献しました。

昭和12年(1937)には飯沼正明が純国産機「神風号」で東京―ロンドン間の飛行に成功し、世界最速の新記録を樹立しました。日露戦争後に松本に陸軍の兵営が設置され、大正4年(1915)以降、有明村の富士尾山麓一帯がその演習場として使用されました。第二次世界大戦中の昭和20年(1945)には現在の新屋及び現在の中央図書館南方150m付近にB29による爆弾投下があり、複数の死傷者がでました。

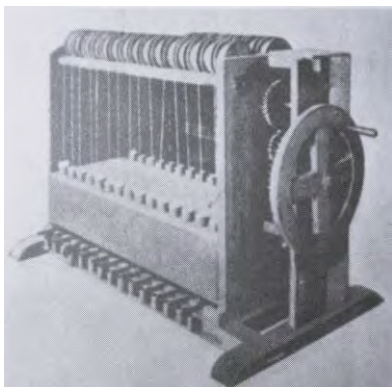


図2.43 初期のガラ紡機



図2.44 遭難記念の碑



図2.45 荻原守衛(碌山)作「女」



図2.46 明科駅前に運び込まれた蔘

(6) 現代

昭和28年（1953）から昭和36年（1961）までの「昭和の大合併」により、旧5町村（豊科町、穂高町、三郷村、堀金村、明科町）が誕生しました。

昭和30年代から各地で開田事業がすすめられ、それまでの養蚕用の桑畑が水田へと変化しました。昭和40年代に国営・県営の整備事業等により、梓川からの水路や農地の区画が整備され、三郷地域にりんご畑が広がりました。土地改良事業も進展し、農地は整然とした区画に整理され、コンバイン等の大型の農業機械による作業も効率的にできるようになった一方、小さな堰や畦畔木等は姿を消し、当市の田園風景は大きく変わりました。

昭和40年代以降、豊科町や三郷村では大規模な分譲住宅団地の整備が開始され、宅地が広がりました。同じころ、穂高町では北アルプス山麓に、都会に住む大学教授や医師、作家たち向けの別荘開発がすすめられました。現在でも「学者村」と呼ばれて利用されています。NHKの朝の連続テレビ小説「水色の時」の舞台になったことや、ファッション雑誌『an・an』、『non-no』等で「安曇野」が紹介されたことで、多くの観光客が訪れるようになりました。

昭和63年（1988）に長野自動車道の岡谷JCTと豊科（現 安曇野）IC間が開通し、平成5年（1993）に豊科ICから上信越自動車道と合流する更埴ICまでが全通しました。平成13年（2001）に長野県烏川溪谷緑地（水辺エリア）、平成16年（2004）に国営アルプスあづみの公園の堀金・穂高地区が開園しました。昭和60年（1985）に「安曇野わさび田湧水群」が名水百選に選定され、平成28年（2016）に拾ヶ堰が「世界かんがい施設遺産」に登録される等、今なお自然あふれる安曇野は観光客を惹きつけています。

平成17年（2005）に5町村の合併により現在の当市が誕生し、市制10周年の平成27年（2015）に新市役所本庁舎が完成、令和7年（2025）に市制20周年を迎え、様々な記念事業が実施されました。



図2.47 ラジオドラマ「鐘の鳴る丘」のモデルになった有明高原寮



図2.48 昭和63年長野自動車道豊科インターチェンジ開通



図2.49 万水川と蓼川



図2.50 安曇野市誕生カウントダウンイベント



図2.51 市役所本庁舎